



松の図

特別
~13
4268
8



113
4268
8

朝顔日記卷之六 故芝叟遺話

柳浪 著

十三回 関

名妓紅拂の李衛公の英雄と鑒佳人鶯々ハ張君瑞
 が才情と憐ふ私奔私約の醜態ハ渡莫兩個一貫たる
 その氣烈ともて白璧の微瑕ハ掩足おん宮城阿蕪次郎
 由ありて駒澤の家督と継次郎左衛門と名と更めたる秋
 月が妻水青ハ勿論女深雪ハ此ありしとい夢小たも知ず駒
 沢ハ別人まこと心得一心誓て異夫見へじと遂小其家
 亡それより國戸が舎止らまてハ鍼の席坐し或ハ
 院幽らまて火災の臺在在が幾十の艱苦と嘗悉

高
玉
堂



安宅加保 卷六

9-2163

おろくに今い憂身と捨果て。世は又怖るべきものいふけれど
渡海の泛宅に坐て、亡頼者の觸犯と豫避、夜は終夜寝
も寐らまらず。名たる播州灘、半百里程の大津なる小候も
秋已に果とまの、風いよく烈しく、況て前程ハ鳴門の奔潮盤
渦出看々、濤起て山の如く、船と蕩颺汰敷、つ允庸の
おとせば、隨即眩暈つべし。さる小深雪ハ端然と危坐て顔
色も變てぞ在ける。いつり高砂の浦畔と後よふ、明石の
峽戸と過、又来方の想きて、いとくその人と眷戀、只管神
馳し、がや、都の天の近きたるぞ樂しむ。水送山送、
蘆が散浪速の港へぞ着にける。かくて深雪ハ浪花ととち出難ぬ、
帝都は歩着て、嬉の余旅疲をいといはず。疾や遅と紫陌は入や
いる。居趾ハあらず。只宮城阿蘇次郎が僑居ハと。雲擺む
やうよ、尋ね捜せば、速りよ知るべし。看すく、天も
晩たまに、只得先斗町の逆旅店に歇宿と占。自來盤纏
として準備せざるも、あるほどの隨身衣と沽代なり。日
の費用とす。いづと阿蘇次郎に遇さへとも。バ、自在といふ
る、あとも高と括。果ハ襲までも、粥萬盡せしど、不論好
反さて、其寓居と漸下河原まで、尋ねあたらし。今ハ
あらぬ票札に替てり。ける也へ、唐突にも、叫門し、さく。
貼壁の賣烟舗、たちよきて、阿蘇次郎が下落と問ふ。店
小二が着實隣家、宮城阿蘇次郎殿として、學問の師
範と做人のふいせし。が、何事のあしけん。近曾遷る中國

下らまこり。その後、鎌倉に住して、今ハ声價人よふ
て在せるよし。ある書生衆より、傳承まはさきといふ
けると。深雪ハ聞よ、阿と叫び、忽地、仆伏て、半晌、昏
り。ふまを看より、對門、隔壁より、人影、集合。顔ハ水うら、灌
ぬど、けまば、こかくして、徐々、小唄、人々ハ、烟舗より、動
静を聞て、とふら、哀まが、多方と、懃ハ、扶持、原来、宮
城氏、由縁の人まら、宮城氏、鎌倉、在すよ、ハ、吾曹も
仄聽と、べまぬ。ともあらば、早く、鎌倉へ、下て、對面、あま、鎌
倉といへ、ハ、迫るるやうぬまど。行程、僅ハ、十日餘と、とつる。
さぶか、心怯、お、獨行、の、かど、放心、不下、おも、ハ、氣
ぬ、的、實ハ、脩、たまへ、着、力、て、いと、懇ハ、懃、ける。何處、の、浦
おも、夜、又ハ、ぬけまど。分て、都下、ハ、人の、心、も、優、く、仁、け
あ、て、那、の、官道、と、ち、け、バ、日、の、岡、の、到、下、ぬ。そ、ま、こ、り
山科、と、つ、地方、を、經て、大津、と、つ、驛、舎、あり。今日、ハ、ま、ど、日
も、高、け、ま、バ、大津、ま、で、ハ、容易、往、せ、た、ま、べ、ぬ、ぬ、ん、ど、問、ぬ
ふ、と、さ、へ、い、ひ、の、ま、る。深雪、ハ、や、人、心、地、つ、と、て、都、人、の、好、意、と
感激、ヤ、グ、て、杖、ハ、杖、ら、ま、て、蹴、揚、の、阪、を、躓、り、燒、が、懷、と、過
ゆ、ま、り、て、程、か、く、名、た、る、逢、坂、山、ま、ど、着、ま、け、る。あ、の、處、ハ
星、ハ、湖、水、も、些、見、え、て、渺、々、た、る、水、光、天、ハ、接、して、熈、烈、し
げ、ま、り、深雪、ハ、猛、然、と、お、り、ふ、や、ま、あ、ま、は、ま、り、さ、ま、の、東、路、ハ
行程、か、と、迫、なる、ふ。へ、つ、り、衣、裳、も、沽、却、て、裂、縫、片、衣、一、套
憂、身、と、掩、つ、あ、の、項、の、寒、氣、肌、肉、を、侵、し、心、地、ま、り、例、ら

五三保 卷六

三

ず且這里までの一路も京へとへ着たをバ情郎小遇
みとと。ふをとのと頼来て幾許の艱苦と嘗しよその人
今ハ在さどして鶏が鳴東の天ハ在とと聞はどく精力
と脱し。往つ還つ風痴のおとく獨躊躇邊ハ関の
清水も墜紅も埋もも神の檜垣もよふ葛も色ハ見せ
一霜枯もとりふ返暎の影残る對山の門なる間
よつ一陣の朔風吹嵐て單穿の骨髄ハ冷徹もハ遍身
たちまら粟粒ちこそそのまゝ寒戦ぞおぼえず咬牙と
さへふしつた右顧ても左顧ても子然たる一身ふるふ
かく俄ハ寒邪ハ冒とまて煩燥く心細きことつとつり
ねし今ハ一歩もとくひるあといはず只得ふの夜一夜

泣あうけけるが。曉ぐと風をこしきりて。疎雨のやう
よふと出るよ。まと一層の愁とま。泣く宮居の廡下ま
て匍匐ちきて。残喘もはきあへずぞあてける。ふの朝まどた
小驛の里正等幹あてて経過し。互臥せる人の啼く
声。いとそそぐたるハ草葉およいる虫の音よもまがへる
と。聞咎て立とまり。但見をば。いと朧たけおる未通女の。
いたく窶として。身ハ一套の襤褸と纏ひ。戦栗居をる
顔の小廝が荷る諸葛菜の葉よ。青く。さ。果敢
おげふる舉動ふるふ。ふく憐閔と催し。夥伴のものども
小うち語らひ。這の病女ハかく負窶し。か。た。と。血
端の賤からぬハ。へうさま由ある人の果からん。さても痛

小生原 卷下

深雪こけと形かたちりて
海道かいどうの流落りゅうらく



心こころふりふりききん

心こころぬぬあ

心こころあ

あき

か白しろの花はなの

いといとななりり

高三隆連



さふと小あらずやと。即便袋よ。丸薬かどころで。是を
飲しむまば。土人ども。やぐて熱き白粥など。拿來たうべ
とせつ。里正いよと。土人等と商議この處よあやの黄土
小屋と修らひ。藁の席と敷せ。稻巻ふどして。卧たる上を
覆ひて。いさうり寒冷と凌せける。交加の人むまを。とらひれ
と。一錢二錢と去りて。過けるとかや。深雪ハ阿蕪次郎と慕
あま。日ハ終日。夜終夜。流涕焦泣ほど。遂ハ両眼泣潰。
今ハ蟬丸の因果と惹て。俄七目と。果ハ衰とつふも。惹ら
ぬ。まろろ。一身の病毒銀海ハ疑磊ハ。へこや。半月をう
ちて。軀ハ健ふか。四肢の屈伸も自由ぎよけ。さよ。かく
他郷ハ流落。刺膝容るむ。その小屋ハ起。目ふせ。さよと
何ハ譬ん。さよ。由縁の方より。とて。よと問。おまを人し。ぬし。
故園の記念。り。伴いし。も。たり。ハ。天虚。や。月日の。さ。りし
と。それ。さ。一拜。ま。ま。ぬ。身。と。ぬ。て。夜。あ。ら。ぬ。ど。も。野。干。玉
の。暗路。と。迷。ふ。さ。び。い。り。と。お。た。音。信。る。も。の。と。て。ハ。馬。驅。丁。の
唄。から。ぬ。バ。松。吹。風。ハ。淵。の。か。が。ま。の。響。の。と。あ。る。時。ハ。筑。紫。瀉
の。父母。と。戀。ひ。あ。る。時。ハ。吾。孀。ら。可。憐。郎。と。想。ひ。屈。して。ど
居。た。ま。け。る。忽。日。ま。と。父。老。ど。も。来。て。深。雪。ハ。對。ひ
り。や。う。嚮。の。日。女。の。惱。ら。う。て。一。時。熱。ハ。犯。さ。れ。て
の。讖。語。よ。あ。い。と。早。く。鎌。倉。ハ。下。て。こ。が。郎。ハ。遇。ま。り
し。と。幾。十。回。う。い。ハ。ま。た。て。そ。ハ。真。情。ハ。侍。や。と。問。ひ
け。ま。ハ。深。雪。應。て。声。う。さ。ん。も。て。い。り。ふ。も。こ。が。郎。ハ。東。方

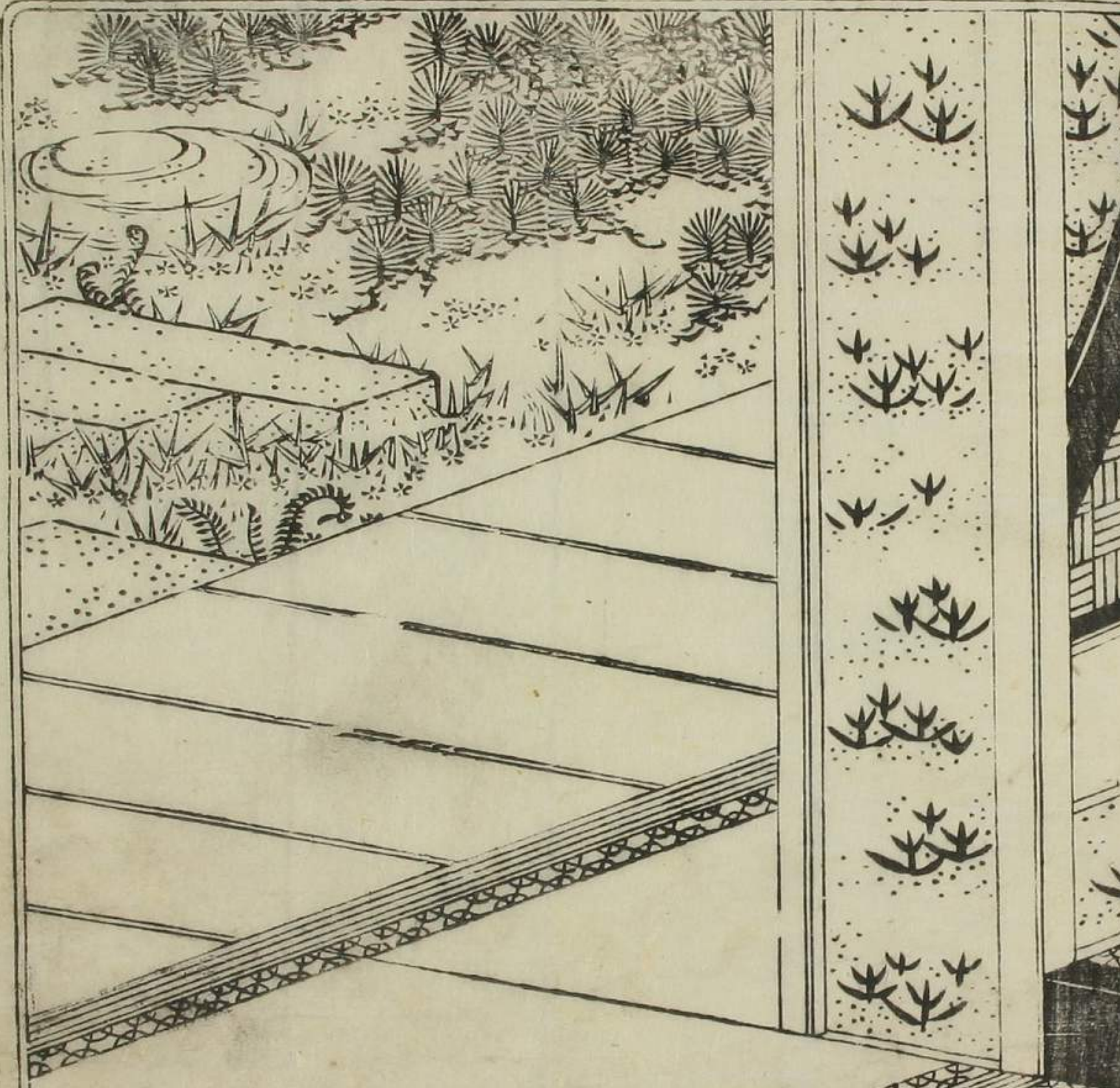
の天ふときくからよ、尋ね遇人と歩来て、あらとつりや
病寒、おの路上よのたきふし、不意目りの見えぬ身と
ふてぬ、まういあまどおのえやと、命のかぎに精かきま。
神併の眞助とたのえ、環會とたもひとづる、尚おのまき
よ結果まば遊魂とねて、下りてはふとつり父老
いへらく、そもあら、伎よハ、竹皮を習熟らまたる伎倆ハ
ろらどるや、深雪ハ聞てうち、黒頭、既、然、らら、つ、三、絃、子、と
彈會しへる、父老ハ己バ、ろろふ合へる、臉して、好く三
絃とさへ彈ままバ、鎌倉へ下らる、ふいよき飯資、お、
とて、己いちとあぢちて、驛中と募、五錢七錢聚り、
やがて二貫ごうりふどねておける、父老ハおの錢子もて
骨董舗よ、一張の檜柄三絃を買得て、深雪よあたへ
いどおまを彈て、何かとも曲子と唱ひ、此をりておまも
纏頭と得て、おまともて路費と、一驛一驛と驛送よ
鎌倉へ下らまよと、いと深切な教導ける、這の父老も
まう、得がたき奇特のものよどあまける、深雪ハおま
よう、父老等が好意を嬉しと、いどとらバ、おの三絃を彈
て東海道と下らんと、沉思よ、おまかく瞎眼と、おま小た
まバ、今や即ち會面とも、極めておまとい、認たまハ、おま
あまバ、那方よも記得ある、朝顔の曲子と唱よ、おま、
袖ハ不覺と滴せる、露の乾る間の葦の萎めるを、おま、
つきて、憂身と照す日影さへ見る由も、おま、干隔、
傍

女たゞ羞澁と難面と涙まぎらす疎雨のそらくとま
もふをかしくと操ふる三線の愛惜と夫戀鹿の鳴音より
哀情ふくむる声口よハ聞人おとよ感耐霜は咽ふ黄
鸝は優王迦陵頻伽よも劣いせしと唄とくいひさびさ
ほどよ。那方這方よもてとやととて露むうアアハ
まど恵この纏頭の員副ていまハ綴補かまどか新し死夾
絮とうら襲。餘寒と凌ぐ便ともかてふと。さて這の
深雪が。往先くの土人ども深雪が真の名をさうねハ
只朝顔くくといひ噓不と只これ朝顔の嬰と喚做
て。海道筋よその名高をさふへける。まゝ朝顔が經
過ところの驛く朝貞の曲子大は流行。狗うつ黄口兒
ハさらふもいえず。乾菜葉とごむ飯盛婢も。殺鬼春
喫無籍漢まで。あの曲子と唱和。門く巷くハ。ふまが為
ふかーがまー。

十四回 川

あの春ハ羽林大内介多々長満興殿。幕府の御休暇を賜
さま。本領周防の山口へ赴任せらる。寵臣駒澤次郎左
衛門御前驅たるふよ。騎長岩代瀑布太と同道して殿
よ。三日先だち。鎌倉表と起行け。行ハ程ぬく業平
の中將の鹿の子とたらと咏せ玉ひ。富士の山脚ぬる
駿河の府中ふど着きふける。駒澤も今ハ大藩の國老格
ぬまハ。その行装へと美々かき。本陣ハ駒澤が定

紙の朝見
鳥の朝見
朝見の鳥



○安右加保 卷六

〇九



あひのひの
あひのひの
あひのひの
あひのひの
あひのひの
あひのひの
あひのひの
あひのひの
あひのひの
あひのひの



紋の幕と張。泊扎高ヤリ建かきて、玄關前ハ砂子堆く
 盛あげ。そのころ水うち灌ぎ、亭長の麻社袴うち着て。
 恭しく候迎ぬ、駒澤次郎左衛門正廳上をば、亭長が奔
 走大くおらず。次郎左衛門やがて、亭長は宿資とやら
 せぬ、かくて次郎左衛門ハ浴室と出リ、一盞茶時湯氣お
 解し居て、堅右と看よいと新ぬる矮屏風、まぶしく可
 賞ぬる一ひらの色紙と貼交へてありける。はくく讀
 下せば、已一年鬼道の螢狩の舟よて、深雪が握扇よ寫て
 やまたる。朝顔の唱歌よてありける。次郎左衛門ふりく
 不審く、右思左想よ、那の同舟の伴からで、まるべうもぬ
 き夫の唱歌、誰水莖の痕りあらぬど、斯處よて見んとハ
 料らごまると、とふりく放心不下、そのまゝ掌と拍引
 客女と呼よせ、かの色紙と指點、まハ何等の人の寫たる
 小。女ハあらずやと問けまば、引客女應へて、ふの屏風ハ
 漸ちりきころ、裝飾てまゐる侍、御尋りる地紙の文字
 ハ朝顔の流行曲子なるよ、弊宅の児輩の寫字師
 よて、寫と餽らまると、亭長のまうさる、承ハてぬ、鎌
 倉よハいまど、薺の曲子ハ時行まうさずや、這里等の
 驛くハ、頬よまの曲子ともて、雑し、むくほけふる馬子
 ごととら、唱ひあごを侍るふとつ、次郎左衛門ハ其ま
 眉と八字よ形し、そハま、何如なる縁故小より、時行
 出せしごと、いゝ、恠りる面もちせるおど、引客女いふ

やり。さきハその事よしべる。其の頃朝顔と喚ませる。十
 七八どりの美しき藝妓。東の方へたづぬる人のあるとして。
 畿内よきところへ来て。その舞の曲子と三線子ふかけ
 て。いと有趣唱ひ侍る。始りハ花子のぶとき風状よりしだ
 今ハその藝の庇よて。張三李四よきもてしやとまて。やく
 時りき。おとよの驛よ留りらまて居る。客官ふも召れ
 て聞せたまはる。御慰鬱ふもね侍らんと勸ぬ次郎
 左衛門聞らちよきも驚悸ぎ。何とねく肚裏よや徹けん
 さらばいらちやく聴まねいと。同歌せー瀑布太小對ひて。
 おもとと議よ。瀑布太も。今宵ハことと徒然か。そハ一
 段よりりてと諾ふひけるゆへ。そのまき引客女よ吩咐て。い
 るぎかの盲女と招き来らむ。時むくりあきて。宿の
 下徒が朝顔が泰てさうらふといひつぎ。藝が手とひき来
 て。縁席布たる階除よ坐せしめぬ。藝ハもとばらげよ
 跪はき。低頭して礼とふせる。その舉動臃氣からぬハ
 次郎左衛門ハ燭の火影よた。一目看て。原来深雪がぶれの
 果かるうと。肝にぶきたる遠方よハ。藝ハ律呂と調せつ
 聴賓客とこと即とい。神からぬ身のえもあらで。操を初る
 憂身よも。虫々知すとつふものねらん。只何とねくうちさね
 ねのづうらぬる涙声小て。
 一村さりのとらししとふまかすと。ねー反く悲壯くも彈丸

一村さりのとらししとふまかすと。ねー反く悲壯くも彈丸

〇一

唱心うたいこころ空そら吾わが嬌めづぬる。夫つとと想おもふ想おも夫つと憐あは夫つとの春はる雄をとハ
偷あづか眼りよ。看みとバ見みるほどうたぐひぬき。とら妻つまふるう痛いたしや
世よ亡な人ひととおもひし。かくも窶やつきて存ま命いのちありし。見み
當ま初はつハ花はなやく容よう貌ぼういと窈うて窕やうは媚めきつると。今いまハ周しゅうわる朝あさ
顔かほの露つゆと帶おびとら愁うら眉まゆ淚なみだ睫まゆ。とふうくもたもひし。うら
で。氷こほり人ひとして舊いの名なと告つとてし。あよぬき過あや百ひゃく千せん回かい悔く
ても還かへらず。妹いハとまごともあらぬも道理とて。明あ石いしの浦うらの盟まじ
とたぐへず。とがため小せ節せつとたて。家いへと逃のがれて飄ひら零れ来き没め秋あき
波なみとまでおぼたると。極こつてあま哀あは慕なのほもさる。殃わざよヤ
あらん。可う憐れ妹いが情じやう貞じやうやと。骨ほね髓ずいは徹てつゆる憂うれ悲ひしと。
心こころ胞ほう胈たむと白しろ刃やいばもて。剛こくよと堪たぐたぐみほと涕なみだ洒ひハ泉いづみの
おとく。声こゑが吞のみむ泣な顔かほと。岩い代しろ見みらるしと。扇あか
掩か翳かげ背せ向むかハ。廣ひろ吐あ稠ちゆう人ひともこもあらず。涕なみだうちかゝて黙もく
志こころたる。瀑たふ布ふ太たハ一い個こ鉄てつ腸ちやう漢ま。鼓こり方かたと斜しや硯えんて。勞らう仕し
ふてありき。唱うたごまの殊こと勝かちと。伊い勢せの海うみ席じやく田でんよ。今いま
りきて有あ趣しゆうりき。今いま一いっ曲きやくと所ところ望ぞくけると次つぎ郎らう左さ衛ゑ門もんハ
あまを止とり。纏まと頭あたまと與あへて退ひくむ。瀑たふ布ふ太たハ執しやく事じ小せう悖び
かとく。いと敗や興きやう氣きの嘴くちばし臉おほり。次つぎ郎らう左さ衛ゑ門もんハ適あ間まよ。見み
胸むねうちほぶきて。悲ひ歎たんのあまき。ふたぐび聴きこまのひく。強か
て瀑たふ布ふ太たハ攔らん止としぬ。かくて次つぎ郎らう左さ衛ゑ門もんハ夜よ深ふか人ひと鞞ぎんる
と候まちて。又またも前まへの引ひ客きやく女によとまぬき。仔こ細さいあまバ。甲か夜やの朝あさ
顔かほとやらんと。密ひそよまをへ呼よせんと。たのどけをい。

襲わさるは
 朝顔の曲子
 とらたつ次郎
 左衛門これと
 聞ておぼろ
 哀憐と催す



〇安光加保
 卷六

〇安光加保
 卷六

〇十二

引客女ハ心成得て。そのまゝ人成走らせけり。使
問てつゝやう。朝顔ヶ宿よりまゐりす。比先清水と
つゝ在處の饗筵ふよむきて。迎轎に乗てこく往こられ
ば。今夜ハ那方小宿歇やそらん。天明でハ歸来す
ましましどのよしと聞。次郎左衛門深望とくつかひ海
月の骨は遇とくぬく。いとはぬく想屈まじ人志
をす嗟歎煩悶と甲斐ふ。次郎左衛門例五更起
行のまふをば。夜間ハ朝顔ハあふまといまはず。瀑
布太ヶ嫌疑かりませば。計較万種もあらんとおしへ
こ。今ハ何ともせんをべかく。ほぬハ肌身と離る
妹ハ記念の扇をとらうて。亭長と呼よせて。此一
たる縁故のあまは。あふの扇子ハ宵の婆よとけられ
と。まゝ別ハ一裏の金子と副。諄く托きて通與々ハ
亭長ハあまを収手。慎てその托意と畏ぬ。亭長
ハ二位の客官と送る。まだ夜ハあけぬぬも。また
朝顔ハ何ととと驚りて。己の下刻ハやうく出来
亭長ハ對て昨日の謝と叙。朝まだきよ。忙しく呼び
来したまふハ。底事の在りける。とあやむ。亭長
へらく。別の事小もあらむ。甲夜の貴客の御托にて。
あまを汝ハ羞し。とよと。一柄の扇子と一封の金子
とを遺し。あまをたると。そのまゝ手廻しをば。朝顔ハ

肩かたがかた頼たのり、ままははふふりり。故ゆなきなき御おん方かたよよ。かくかく沉重ちんじゆうなる
 金子かねこ賜たまふふべきべき覺おぼししべべららずずとと數あ回ま扇あ子ごととばば捻ひねりりままははし
 撫なつつここととりりつつててああららけけるるがが。ややととららそそのの扇あ子ごととささしし出で。
 家だ公んのの扇あとと見みててたたままははまま。尚しやや薙あとと挿さめめてて、そその
 側うまま。ここららハハガガははねね。唱なひひ侍しるる。唱な歌がとと寫かててハハああららごごるるやや。
 ととここここねねくく。よよ。亭あ長ちハハ眼あ鏡めととららけけ。そそのの扇あ子ごととひひら
 とと見みてて。正あ是まくくいい。ここららぶぶくく。一い輪りんのの薙あのの花はなのの畫え。露つゆ
 ののひひるるままがが寫かててああるるハハ。みみををとと聞きくく。朝あ顔がハハおおけけええず
 吻くとと長た大だい息いきつつ。亭あ長ちハハ扇あととららちちくく。見みてて朝あ顔が殿の
 ままごご何なに。寫かててああるる。朝あ顔がいい。慌あてて。何なにぶぶとと寫かて
 ああららんんとと。ままららハハいいくくもも彌やよよ。ババ。亭あ長ちハハ扇あのの裏う書ら
 叔し誦じゆ宮みや城じやう阿あ蕪わ次じ郎らう事じ。駒こ澤ざ次じ郎らう左さ衛ゑ門もんとと記きしてしてあり
 原は来ら駒こ澤ざ殿のハハ舊もと宮みや城じやう何なに某なとと申ませせ。人ひとおおけけととささと
 いいひひもも果はぬぬ。朝あ顔がハハ呆うととままどどひひ。おおももハハどどしし展あ轉ま。
 人ひと目めとともも羞はずずととしし乱みしてして。身みハハ空う蟬せみのの蛻ぬ売う。どどく
 什な玄げん宮みや城じやう阿あ蕪わ次じ郎らうとと駒こ澤ざ次じ郎らう左さ衛ゑ門もんととやや、それそれここと
 ととがが尋たねねたたるる人ひとかかまま。南なん無む三さん寶ぼう遲ちかかてて。いいてて斤しん時じももこ
 ややくく追おははつつんんとと。足あもも空う。驅かいいどどすすとと。亭あ長ちハハややががててひひき
 ととぐぐりり。そそののややうう。焦あ燥そうたたまま入いるる。ああまままま。慌あてて急いぐぐままな
 ババ。躡あきてきて恠あ我がももややととららんん。駒こ澤ざどどののハハ五ご更せい起き行ぎやうののここと
 かかままババ。迎むかひひもも急いぐぐ。追おつつととぐぐたた。殊ことよよ。大お雨あめ。いいっって
 途みちしし歩あららるるべべきき。ここハハああままぜぜひひ。往いふふととふふららババ。ああままとと着あるる

往 志やまると。簾と笠と把て運せ、朝顔ハ涙と流し辱
ぬしこそそのまじら着て杖とたのまふたどくま西
の方へといそだけ心ハ飛と脚果敢どらず雨ハます
く降まきま宛も篠とほくおとく斜風よ衣服と
濕腐し辛ドて大井川よ歩りほけバコハ悲し大鼓
打鳴して只今川苗をぬとのまうさハぐ深雪ハ已でよ
氣疲足痿てままと聞よ身も世もあらます大内
家の御藩中駒澤次郎左衛門殿ハ何如ふと問ハ問屋
場の者どもそハ今一時むらり先よ川と越たまへりど
いふまぞ岸うつ浪のよるぶかく松よく入葛のたのま
たえおほえざ大地よ打坐躑躅して悔めと詠みく
たぐ声寂放ちて泣叫ぶよ刺さへ笠とバ川風よ吹
こらきて

十五回 豹

駒澤次郎左衛門春雄ハ大井川ヲ渡りてよ大小天
龍ハさらぬ路些の川沮ぬく刺連日天暗よて曉
起ち晩よ歌程ぬく帝京よちつづき草津の驛ハ
まだ夜深よ出で午の貝吹頃ハ山科よいたる所謂
奴茶屋よて少憩とぬ雨時一個のむろがた
たる声して常盤の州ハ山鰻鱺と唄ひけく蛇を
使て銭子をむ次郎左衛門間隙まを成透看白齒
者棚倉忠吾と呼ひうち耳語また簷子よ堅て

く行ふと二里むかひと冷静き古刹のあるとこ
て、蕎麦たてさせ、筑八と跟方より従うへ門より入
来りて閑玩ける。おの處ハ伏水の六地藏とてそ
の昔小野篁冥府へ往還せしといへる古跡あり。
忠吾ハこや弄蛇を兒と將て、僻處の花の下は疏
せて待居たり。次郎左衛門ちりつぎよきて足下
ハ橋雞菴よりあらすや。別來ハ久違たりといふに。
雞菴頭と搦て、おもとを看まば、鳥金細絹は大内
家の唐菱の紋と染ぬきたる小袖と看し、一様外
套とうち穿て、茶苧の袴と跨美と盡せる大小刀
と佩たるが、へと堂くけぬる武夫かた。おもと則ら
當初の宮城阿蘇次郎よてあまける由へ殆その最早
く発跡しと羨ま。且巳が飄零たりとうち羞澁ハと
應へて俯伏ふけるその状髪ハ五六寸生長て。剛力ゆた
たまど、些の力もあげ見えて。身ハ海松のおとき
一套の藍縷とよといひ。朝沾まとよていと淺間し。次
郎左衛門ハ跟隨を遠ざけ、その身縁故ありて、駒沢の
祖業を襲、今ハ大夫の列よも加ハし。おもと、まことハ
不思議の因よよきて、秋月弓之助とも縁者とぬま
し。が往年足下の計ひよて、種々の齟齬などあり
たるおもとと聞し。君子ハその罪を悪んでその
人と悪まざといへる。我いさくも衆よ介むおもと

天竺果 卷六

源
と退
井川



○安九加保
卷六

○安九加保
卷六

○十九

あらず。我初浪くの身ふり時足下の涯き好意
成承侍ときと袂より一包の金子ととり出し
こハ些少おまどし。露むりその謝意と表すおま
と手自迎與。如何おままはとほどもまで流落られ
たるごと。懇まうち語へば。雞菴ハさしも點慧
ものおまどし。今駒澤グ寛仁大度小して。巴が
舊惡と責ることおく。剩恩として仇は報ひ。若干の
金子と餽たるゆへほとく路頭の餓字とぬるべき
身の恰も大旱は雨と得。地獄にて世尊は遇へる
心地して雀躍したへど。且おのまら駒澤グ徳行
小化せらまて忽地は邪慳の角と折始と善心は

翻へり。幾回金子といたまきて收領む。ときども
巴が奸計よて。鶯鴉と區別る。醜漢子の荻野祐仙
と阿蘇次郎は假扮て。弓之助を計較。阿蘇次郎と
深雪が良縁ととまどけたる。不義不實とばこれこ
悔と愧て。看るく満面通紅。まをく怖ととどく
ぎ。遂はその陰匿を識悔して。獸呆祐仙は影護
奮債こべりゆへ。只得渠が托に任せまらりく無状
と行なひし。天道ハ善は祚し。淫は殃すとや。
いつら車發覺。夜間ハ都門を亡命して。海西小逃
んだ。赤馬が関に在し。從來好る戯とてある
博局は入夥とらし。且其処の稻荷街なる妓。小支

の安毛加保 卷六

那とら入ものよ標熟色と慾とよ囊金ともとべて
蕩盡し遂かゝる身分しまで偃蹇とべとまきと
乾々浄々と泄秘いひ完と。次郎左衛門おて深く
嗟嘆とねし。于戯毒ある薬ハ使用やうによ
て。結句その功も速うねとといへる。足下の奸才え
機よ臨みて正道の事よ役使くとあるりま何や
低細と閑談數刻よおよび足下いいど我よ先達
とやく。山口へ下りて待居らまよ功あらば重く賞
とべしと。そのまゝたち別まて。但りち仰げハ空の
かぎりの浅翠よりちかをとそ。遅日の光輝融
と。恰好雉子の声りちし。好景いふとるし

橋さくまを山毛の志ぐう尾のふぐりし日はもあうぬと

うねと咏せたよひし御製の微妙ぬると一時の興よおも
ひ合山鳥ハ隔て寐とさくうらよとが妻雌をも
取つろしとて且感ど且吟しし。轎子と吊せて
閑歩ける。やがて伏水の甲明亭とりらとまき
母利橋の邸よおちけく。あゝ浪花の卒分堂よ
ま迎の為ふとて並の大座船と設けらまけるや
てその舟よりち乗て。澱河と下まぬそまよる日と
經て本國周防の封疆よ入。今日か人山口へ榮歸すれ
いとして。衆跟従も花やどて打扮せ。已よ府下
垣まで来りまし。豈料す着樓の裏頭よまき

兵長めきとる武士。一隊の健卒と將て、駒澤が前
程とふたぎ、嚴令と號はる。駒澤次郎左衛門御不審
の儀あるより、ふまより直に檢斷所へ去るべしと
附令し、健卒等と喝して、矢袋とけくし、轎子の
前後と圍ませ、外城の御門より入り、御館の石
とバ餘取に見ぬし、十字街頭と横とまきて、檢斷衙
門に到る。駒澤次郎左衛門ハ、この衙門の玄關より上り、
悠々と敞廳うち進まば、こや上席ハ、一族山岡玄
番九と始とし、肉食者並ひ堅とる、あるが中ハ今般
同伴せし、岩代瀑布太も先たち来りてありける、
令泉帶刀為猛ハ、是よりとき相良主馬と交割して、
鎌倉より下居たるら、月番といひ、殊に今日の査驗
にてありける也、日比駒澤とハ二ねき金蘭おきども、
公車ハ私の勞語と做とす、抽列で威儀と正し、次郎
左衛門汝叛逆の企せるよし、顯證を以て、訴訟るもの
あり、意旨ぬくハ、速くハ雪免れさせよと演まける、
次郎左衛門まを聞て、ハハ不圖のことと承はるもの
取、いさかむその覺知侍らす、列位知るおとく小的
莫大の御登庸と蒙ふに、君の御恩と重る身として、何
為大逆罪と犯すべき、何等の黜奴うさるふとと申せし
其奴えやく呼出させ、此と糾明あるべしと苦言を
て回答けるよ、玄番九次郎左衛門と倍と睨、意旨を

○安右加保 卷六

まとハ志らく誰うある。證據の東西とこそ一奪と吟
 吟まハ法司屬吏ども。四方上下は口もき。一個白木の
 箱と拿出て駒澤側は閣きぬ。帯刀とをを見て次郎左
 衛門。この箱ハ有驗の解魔法師。伽羅羅院とつゝもの和殿
 才請。よて君侯と調伏せる。支度るの具もと
 申せ。如何くくと誥うけし。次郎左衛門冷笑ひ。
 夫もこそ小人。仇あるものども。修らひたる。護種と
 た。何れも。其の箱の上頭。一文字寫たる所と打ハ。作
 披る機関ふる。事占たる伎倆。其の淺くさよといひ
 朝す。帯刀ハそのま。拳頭と擧て。一文字と兆と打ハ。
 撲刺粒とひらけて。中ハ一槩の草偶人の形代あり
 たる。透間もぬく。鐵釘と施得たるハ。毛髪も從
 はる。其れり。帯刀ハこそ。副る。願書ととりあげて讀
 下せば。勿体なくも。大守と呪咀殺すべきいと可怖文
 言どもよて。願主駒澤次郎左衛門と寫せり。帯刀ハ
 正視斜祖檢閱る。駒澤が手跡と寸分不誤ぬハ。
 志む。合粘。次郎左衛門呵々と笑て。コハ愚ぬ。帯刀主
 かる。大逆と謀るもの。ぬでう白地。たのが名氏を記
 べき。後世は偽筆るどて。冤訟するハ。小兒の遊嬉小
 も劣る。下策。傍痛し。空虚噴く。帯刀も。ちち點頭
 實是博識の譽ある駒澤ほどのもの。あま。陳腐
 草偶人の調伏とい。その人。似つらぬ手段。さハ別。野心

草偶人の調伏とい。その人。似つらぬ手段。さハ別。野心

と懐者ありて己が逆望と妨ぐべき駒澤なるのへかく
寛の科と赤點黜けんとせし奸計ならんと山岡は
斜祖よかけて寓語いふよと山岡は頻に眼語をれは瀑布太八聽
懐裏より一個の巻軸をとり出し、次郎左衛門殿、此の連
判状覺知あらん、小的豫御邊の風状、不會ごと、一路
上規際、前宵目撃するあたりのありて、御邊の調
度よ、ささぐり出し、あの巻軸奪取とりと、熊野の烏壘
小梵天帝釋より、天神地祇と嚇せし、自筆の起請
文よ、一味の徒黨の血判と押たるをとり出せと、次郎
左衛門些ともさハガず、一卷と閱見て、前の願書といひ
こまといひひ、賈ハ賈たとも、天公も照覽あれ、こハ

明々ぬる、偽迹ものぬると冷笑す、山岡大は焦燥やと
と早く黨類めらと牽出し、駒澤と對決とせよと、高
やうよ叫びたる声の下よ、健卒ども、いと枯瘦て
色青ざりたる修験者と、ま、一個の相貌兇惡なる上
菊石痕夥しく、絶て胖大なる一軀は豹の形と文刺せ
し猛漢子と、高宇小手は細りて、白洲よひきと、
後背よ、いあまとの驚固のものども、狼の如く虎の
おとく、視張して従り、這の修験者伽縷羅院をハ
山岡が手の者拘到たるよし、ま、次ぬる惡棍め、
豹藤内と呼ぶものよ、渠ハ舊江劔甲賀の山奥より出
て、そる、忍術は精く、些の膽略もあるのへ、いつ草

冠の頭領とぬ。江湖上は剽掠を倣して開いたれども。常は賭徒と混じりある。救火顯徒と倣す種々。身と假粧してその踪跡とくらませしやへ。居ころころ。うねらざればその影とたゞ捉らるゝとあり。どしどし。どもしら。粟わげらるゝぬ人。まらるゝ。この豹藤内去る。夕御寶庫は閃入。勘合の印と贓と。逃去んとせし。浩處も宿直の衛士恰好照り。辛うじて縋り。検断所の廳は牽出せしやへ。検断吏勘察衆も相共。糺明らるゝけらる。勘合印は垂延らるゝ。這奴は分際。ハあるべうらざる。いふさま別は。當家と傾けんと謀る。白者のあるは極と。と。近曾至寶の一種紛失せし。

極て這奴が所為とねは。何者は托きてあらせし。と。嚴しく拷問は。およびまらる。初頭は執抵頼。巴が一慮よと出とるよ。劇語たまども幾十回の責苦は湛らぬ。遂は白状して。己自来駒澤が大望に與し。嚮は一種の寶貝とも偷取て逆與とき。今。勘合印と贓と取んと躲入し。總て駒澤が吩咐。そといへ。き。駒澤は二通の口敷と逐一聞完。掾側近。躡るよ。兩個の縛囚と熟祖とてヤイ。豹藤内とやらん我叛逆して。寶貝を竊ませし。ふんど。ハ痕跡もかき。讒語ぬ。從來見たること。ぬき。這面何者。ふり頼と。假意擣は。と。ぬ。て。生天大的冤訴と構。

三三〇

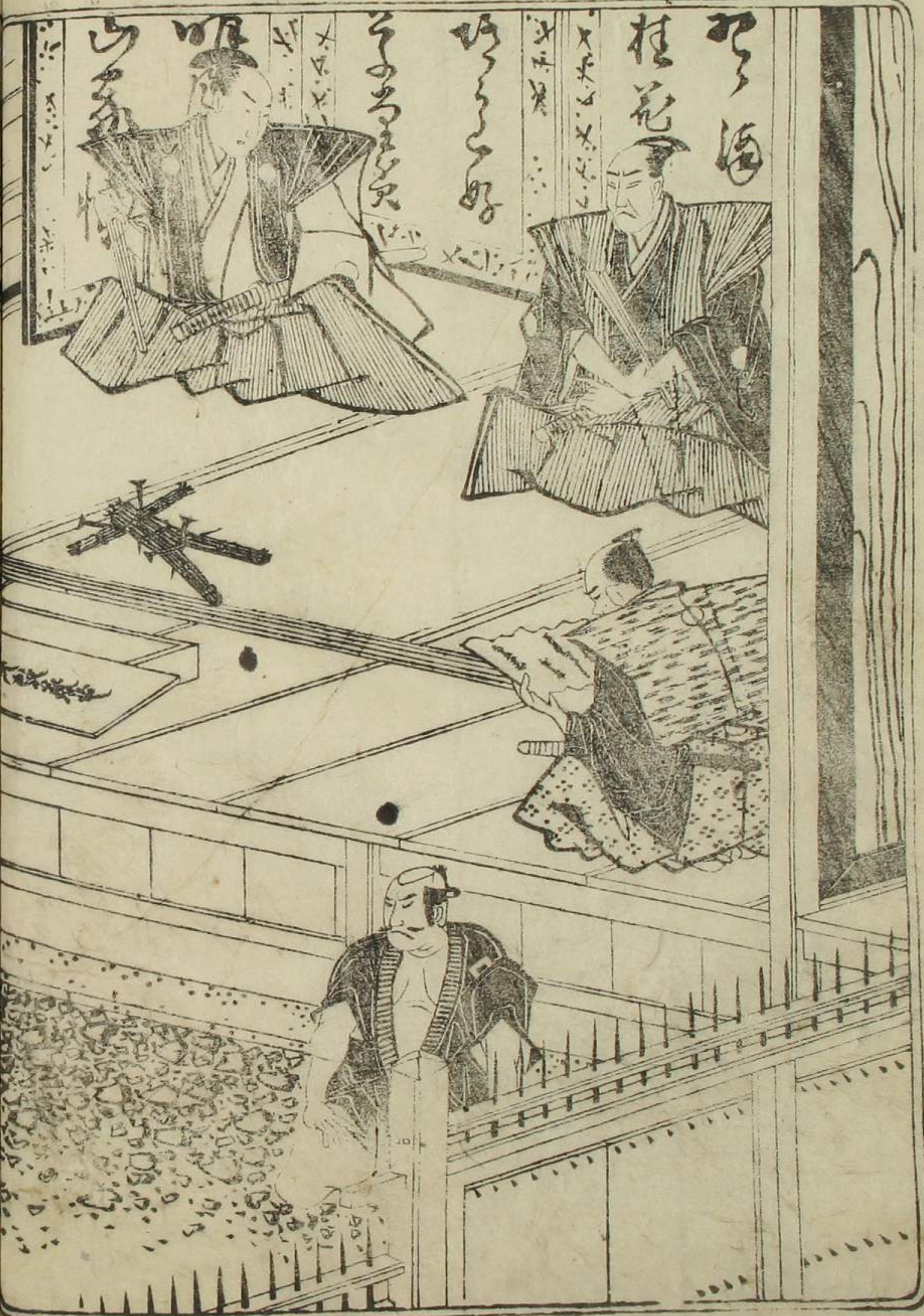
七四

駒沢悪黨
等と對決す



駒沢悪黨

廿五



駒沢悪黨
卷六

たるぞ、その主と申せいごそやく實事とやうせ倘一
点よても偽るよねめて、指一朶はく斫るぬす。按
遅の刑よも行ふいつべいと。嚇威けらまて豹藤内
い次郎左衛門と屹と見あげ。ヤヨ駒澤殿、ねての計較
も不三不四壞了たす。足下が這の修験、大内介殿
と呪咀殺させ、重寶どもと匿しとき、管領の御曹子
と養子とし、まをもと奇貨に使用、果は足下が六ヶ
と養子とし、まをもと奇貨に使用、果は足下が六ヶ
國と押領よせん、猫もまらぬやうお謀らまて、斯
脱く露顯るといつのも、天命是非もぬきこと。已てこ
へ丈夫らまういひて完たるよ、何喰ぬ顔よ、まど演劇
してゐまをい、大賭の局主のやうよもぬき、未練の拳

動よこそあまを、出放題ぬる雜言を吐け、側ふる修
驗伽縷羅院も、一様の口氣よて、拙僧も和殿よ托し、
國主と調伏し、驗あらば千金と興んと約せらま、
丹誠を凝し、秘法と修せ、痛情くもかく怯面、就
虜たるこそ微運まよと、いと朽惜げよ、いつく始て駒
澤とい見あぐるよ、一表軒昂その顔色ハ溫柔たる、沉勇
よ念と含ゆる威嚴の、そらる凜くくおぼえて、死らむ
月下ふる梅花の霜よ傲る頭勢まよ、伽縷羅院意
駒澤とやらん、其人忠直まげよおぼると、已はたご
母と養ふ資のよ、後先とつへまらるよ、惶あらずして
已よこの軀と活却たまば、その施主よたのまねて、只

○史記加保 卷六

無罪人、殘害とつけたるハ、一頭ハ孝養のため
 一たまど、一頭ハおもはざるも、殺生戒と破る大や
 むる罪科とほくま、と殆後悔したへぬバ、たぐら
 萎まで俯ぶさぬ。冷泉帯刀声を屬まし、駒澤ハ
 害せんと偽文ハ勿論、那奴等が冤誣の叙次、高の知る
 生匹夫めが好騙局、ふるといひかまといひ、揃も揃ひし
 惡黨ばらいて骨と挫ぎていせん、喘吁声ともろとも
 加縷羅院ハ一轉と伏て氣絶た。ま、ハこれ一百兩の
 施主の為、自うら舌と齒切て、駒澤ハ雪冤をべき、口
 と滅んと死た、驚破豹藤内と、木馬刑ハ行さん、帯
 刀ハ金およりし、

慌忙その支度して、犇きあふ、豹藤内とまを見る、
 大駭き、擧頭て山岡目語して止む、玄番ハ
 進出帯刀、嚴刑ハ止らまよ、眼下ハ修驗ハ自
 滅せ、一箇の證種と失へ、豹藤内ハ靈符の尊
 像の去向と索べき、千係の者、ま、渠を責殺さ、
 臍と齒の悔あらん、今日の査問ハ、ま、まてにせらるべ
 と、一帯刀もあま、同、尤然、倘這奴とも責殺さ、
 一期駒澤ハ、雪冤秋ハあら、直ハ健卒とも令、
 豹藤内と牽出させ、繫く獄屋へ繫ぎ置、
 次即左衛門、對ひ、御邊の上、御不審全、
 明る中、
 釣座と避憚あ、逼塞、
 付令す、次郎

左衛門ハふきぬ畏て隨即衙門とたち出まば設う
たる覆細轎子に乗て愴々烏衣巷の邸に取只得
門戸を閉ぶく慎居たるる

十六回 柴

さて深雪ハ喪明とよてぬ果て空しく朝顔の曲子を
唱ひ東海道と吟行いぐ。不料も駒澤が本陣！呼ばと
那の曲子を唱へけるよ。次郎左衛門、たぐ一目見て、原来
我情婦深雪よてあまけるる。我今名と替て、駒澤某と
称せしちへ舊の阿蘇次郎ふことハゆめねもひよらて。
こがたりよ節操とたて。家とのがとて。おのころりよ流落
哀慕のあまよや。明とへ泣漬とて。かくごころ貧窶

こふまーハ便ぬきふとあまといいたる愛憐さしハや
優て。不覺涙の隨るよ。同歌の人と憚かそ。おいたく
更て、密に遇まくねもひ。よひよ差一が生憎し深雪
ハ他處に往て、出来らぬハ、いっよともせんとへ行く。常
ふ肌身とぬぬの記念の扇子よ。名と更めたる由ね
馬副驛長に托してよまぬ留り置しちへ。深雪ハ
こまよよよて。今まで他人とねもひ。嫌ひ避くる。駒次
殿ハ全然こが郎阿蘇次郎ぬよてあましとよま
とと知。忙まどひけ。風雨を胃して大井川まで戻
ちこし。誰くらん。比先川沮して。郎ハこく渡り
たまひしと聞て。ほどし。かど落し。只管くやそ

○安光加保 卷六、 〇七

歎き、木の河津の開まで、一夜と過おと一年よりも
長くおぼゆ。まさしく病つくべき辰、こまを心
雄くし、くさるおとし、日あらと川と越精神、
ぎこし程と貪ぎぬ、とどろき腕弱小艾婦ふれとも
一縷の情勇類く、護摩の灰も猪狼も屑とせす
て不滞周防の國よ下、駒澤殿の邸に烏衣巷
裏よありと聞、旅の疲も出バこそ、腫たる脚と堪
て、劬勞尋ね来て見まは、のろおーや、頼も力もま
果たす、まよ駒澤殿ハ罪ありて、閉門したまふとや、阿
呀この邸ハ青竹も斜、釘得てあるハおぼく、人の繁
話よたばえず、涙溢落おちて、大地よ倒卧嘆け、声
を放ちていと泣よふくほどに、やとら人環視して、こや
風狂の婦の志りも盲ふるハと、指ざりて晒ふもおぼく
ありり中よハ又縁故了とあらりといへる者もありぬ、
活處よ母子とねがしき、兩個の唄礼人叢と押開、小
を臥とる狂女をバ扶け起し、埃おどろちしらひ種く
懃ハ、何地へやらん將ゆとさける、おの兩個の唄礼ハ則ち
こま、深雪ガ乳媪、真柴ぬるものと、そまが兒子關助小ど
あまら、如何なまバかく湊巧よ小姐深雪よ環會しど
索ゆるよ、往年深雪ガ露陵の邸と出奔せしより、母
親水青ハ號天泣地ふげきさるよ、むあといふうきことなし
真柴ハまこと見よまのびず、主母水青ハ已ガ所願趣意

三五五 巻六

駒沢が
好ふて
原を
川を
比

此書
却
いたる



〇三四〇
上

〇三十一

〇三四〇
上

〇三十一

或告僥倖とあり合る。仲間仲間の關助関助と具して、主人主人の邸邸に
たり出いで、西國西國三十三所の觀音観音と巡拜巡拜。あはま大悲大悲の冥應冥應
ともて、今いま一回一回養君養君と遇あせてたべと。丹款丹款と盡つくして禱いのちはく
いつり三十三個三十三個の簡かんとうち終おりうどいさかもその験験し
あらで、まよと西西に向むかひておくくも、故郷故郷の天あまと赴むかきて
備後備後の州州阿武門阿武門といへる。港澳港澳と着つけるが、去この處ところも名
高たかき觀世音観世音の在いますよ。上かみと下したの船人船人ども、ハ隨意随意よ
風かぜと祈いのちるりまば、菩薩菩薩もなごく。孰おと西西孰孰と東東と分わかり
おて躊躇ちゆうちゆうたまふりま、おの夕ゆふ真柴真柴ハ大悲大悲閣閣よ通夜通夜ハ
おしけるが。老眼らうがんと絞しぼるいと冷つき涙なみだとこ、拭ぬひのいで
隻手しやくてよ珠數しゆくず數かずぬくは、井いと額突かぶつて、日暝ひふし途遠とつ去いの

老らうが主家しゆけの養姐やうせうと尋たづね出いさんため遠とつく三十三所三十三所と
順しゆん礼れいして願ねがはまど。佛ぶつの慈悲じひもあらざるや、まごまご
信心しんじんの届とがるまや、今日けふまでも環かみあひで、依よ舊きう定ぢやう手てと
筑紫ちくしへ下くだり主母しゆぼと遇あひて、何なんといひとけの待まちるべきや、
まご何なんの顔かほあるべき、それよりハ寧なまの身みと海うみと沈しづむ
過世かぜの劫くわつと果くわしぬ人ひと、阿娘あにやの前まへ途と老らうが後世ごせいとも救すくふ
たまへし。頑語けんごと獨語どくごやがて法華經ほふけきやうと誦とりらば、直ちよく
高たか欄らんより飛と入いらん、一心いっしんの覺悟かくごとぞさ、はめたるる。
登時とうじとふらぬ異香いかううち薰か来きて錦にしんの帷ゐ裏うらよ、いともし
妙たうなる玉音たまねよて、老女らうによとま嘆なげきとそ、汝なんぢが誠心まことこころ厚あつきを
閑かんと尋たづねぬる人ひとと遇あひせぬ人ひと、今いまより五日ごにちとぞて、周防すうぼう

の國山口おる鳥衣巷とりし野ふいたる正しく
ねんほげハ夢々あらぬ辱けぬしと真柴ハ信心
肝又銘ト喜こといごとくぬく今日ぬんおのどらに
尋ね来て深雪ニ會面ける古恠ぬるかくて真柴ハ
深雪と己ガ旅店ニ伴歸ておのよと詳よかたりぬ
かア葺の冥護灼然まよバ前程可頼お日しらせ駒澤
どのハ義氣ふうく後妻と迎へたまはずとこへるまよ
寛の難と被りて當分閉門して在すよハ巷の説聞れ
ど世のならハいふる先頃専北山雲陰ぬハ霽てけ
と唱ひーやういく程もあらで寛の陰も晴て世は出た
まひふんそとまていまづ故郷は還るまて銀海惠の保

養あらせたまへやがて駒澤殿ニ申し入團圓替嫁は
たしやうよ計較べしと多方賺し艶説けま深
雪も僅々允容なる由へ真柴ハ甲斐くも志くも赤点い
關助と役て便船ととらぬその暁天降松よし出船と
せし日あらどして故郷ふる路陵の邸よぞ着小
ける秋月弓之助夫婦ハ悦ぶよこかきぬく盲龜の浮
木ニ遇優曇華の花待得たる心地してあつく真柴ガ
勞誠とも賞しけり深雪ハ朝もく垢離と搔精身
潔齋して只一心ニ本居菅聖廟と礼拜してあこれ
大自在の靈應よて夫主次郎左衛門ガ災難と免つと
させ玉へと只祈ふいのりて行時も情ざりしとぞあはまむべし

一個の貞女は不幸よして没秋水とぬる獨空房よ附
嘆どべー。一個の忠臣は冤の災難とかううりて戸と閉た
るが末那の忠臣貞女めてとく團圓や不團圓や次の
な覽て解したまひぬ。如斯の語ハ先輩已道陳なれ共
這半丁の閑空と嫌いて贅附とべるのとも。

朝顔日記卷之六 終

河内十八衛所控部

右 御印

